軍は目下の危機を避けようとし、そして国家の善をいっそう慮り文武両方で有能で、苦労することなくフィリップスを征するであろうこの人を支配者に据えるのが最も賢明だと考えた。

22　この目的のために彼らはデキウスに紫衣を着せ、彼が不吉な運命を懸念していたにもかかわらず最高権力を押しつけた。したがってフィリップスはデキウスが皇帝にされたことを聞くと彼を打ちひしぐべく全軍を集めた。デキウスの支持者たちは敵が数において圧倒的に優勢であったことを知ってはいたものの、デキウスの将軍としての技量と諸事における賢明さを信頼してなおも自信を持っていた。両軍がぶつかると、一方は数では優勢だったが他方は規律と振る舞いで勝っていたためにフィリップス支持派の多くが殺され、フィリップスその人と彼が副帝の称号を与えていた息子も殺された。かくしてデキウスは帝国を手に入れることとなった。

23　フィリップスの怠慢によって方々に広がっていた混乱に乗じてスキュティア人[28]はタナイス川[29]を渡り、トラキア周辺の地方を略奪した。しかし彼らに向けて進軍したデキウスは全ての戦いで勝利しただけでなく彼らが分捕った戦利品を取り戻した。そして彼は彼らを一網打尽にして今後の同様の侵略を阻止すべく彼らの故郷への退路を断とうと試みた。この目的のために彼は優秀な部隊と一緒にガルスをタナイス川岸に置き、自ら残りの軍を敵に向けて率いていった。この遠征は望外の成果を上げたが、変革を企んでいたガルスは夷狄に代表団を送ってデキウスに対する陰謀に加わるよう求めた。彼らはこれに喜んで賛同

[28] ここで出てくる「スキュティア人」は黒海北岸や中央アジアで暮らしていた遊牧民であるスキュティア人を文字通り指すのではなく、黒海北岸に住んでいた諸々の異民族たちを漠然と指している。「ローマ人は、黒海北岸に居住した諸集団を総称して、ギリシア語では『スキュティア人』と呼び、一方、ラテン語では『ゴート人』と呼んだ。しかし、先行研究は、ギリシア語の『スキュティア人』をゴート人とみなし，ラテン語の『ゴート人』も、いわゆるゴート人だけを指すと考えたため 3 世紀にローマ帝国に侵入した異民族はすべてゴート人のように考えられてしまったのである。実際には、ギリシア語では、スキュティア人は、あくまでも黒海北岸に居住した者たちの総称であり、下位区分としてゴート人を置いて、両者を区別していた。一方で、ラテン語では、『ゴート人』の下位区分に、テルウィンギなどの具体的な部族名を置いて両者を区分していたように思われる」（井上 [2013], p. 19)。

[29] タナイス川は現在のウクライナ東部を南北に流れる川であり、これをゴート族が渡ってトラキアに入り、ガルスがこの川沿いに配されたというのは地理上到底あり得ない。実際、ヨルダネスが伝えるところではこの章で出てくるガルスがデキウスによって配されたのはイストロス川（現在のドナウ川）に面するモエシアであり（ヨルダネス『ゲティカ』, 102)、そちらの方が自然でもある。したがってこの箇所の「タナイス川」は明らかにイストロス川の間違いである。

し、ガルスはタナイス川岸に居座り続けたが、夷狄は三隊に分かれて第一陣は湿地の背後に陣取った。デキウスはその第一陣の相当数を壊滅させると、前進してきた第二陣も同様に破り、湿地の近くにいた第三陣の一部を見つけた。デキウスが湿地を渡って前進するはずだという知らせをガルスは彼に知られることなく〔スキュティア人に〕送っていた。したがって見知らぬ土地を不用心に進んでいたデキウスとその軍はぬかるみに足を取られ、このような不利な状況で夷狄から矢玉の攻撃を受けて一人も生きて逃げられなかった。これが立派なデキウス帝の最期であった。

24 彼の跡を襲ったガルスは息子のウォルシアヌスを帝国の共同統治者に宣言し、デキウスと彼の軍は自分の策略で殺されたという宣言を公表した。今や夷狄は以前よりも栄えるようになった。それというのもガルスは彼らに略奪品を持って故郷に帰るのを許しただけでなく貢納を払うことも約束し、そのほとんどがトラキアのフィリッポポリス(30)で捕らえられていた最も高貴な捕虜の全員を連れ去ることを許した。

25 ガルスはこういった取り決めをするとローマに来て、夷狄と結んだ和平を自慢した。最初の彼はデキウスの統治方針を演説で賞賛して彼の息子たちのうちの一人を養子に迎えたが、しばしの時が過ぎた後にその子らの中で先取の気風に富む者がデキウスの君主らしい美徳の再現となって自分が何らかの機会にこの息子に帝国を与える羽目になるだろうと恐れたため、彼は自分で養子にしたこと、一般的な栄誉も正義も顧慮せず、この若者の破滅を企んだ。

26 ガルスの帝国統治への無関心のおかげでまずスキュティア人が全ての隣接する民を威圧し、それから沿岸地帯までの全ての地域を荒らし尽くした。ローマ人に従属する民は余すことなく略奪を受け、要塞化されていないほとんど全ての町と要塞化されていた多くの町が陥れられた。耐えられないほどの重荷となった方々での戦争の上、諸都市と村々では疫病が蔓延ってその地方に残っていた人を一掃し、これが以前のどの時代にも知られなかったほど大きな致命傷となった。

27 この危機にあって皇帝たちが国家を守れなかったのみならず、ローマの城壁その他全てのことをなおざりにしてきたことを見て取ったゴート族、ボラニ族(31)、ウルグンディ族(32)、カルピ族は自分たちの前に開かれたヨーロッパの全ての都市を再び略奪した。他の地域ではペルシア人がアシアに攻め込んでメソポタミアを手中に収め、シュリアのアンティオキア近辺にすら進出して全東方の首府だったその都市を陥れ、多くの住民を殺して残りを捕虜にして連れ去り、公共のものにせよ私的なものにせよその都市の建物の全てを破壊

---

(30) トラキアのヘブロス川南岸にある都市で、現在のブルガリア南部のプロブディフ。この都市はデキウスが敗死したアブリトゥスの戦い（251 年）の直前に王クニウァ率いるゴート族に落とされていた。

(31) サルマティア系の部族。

(32) ブルグンド族のことであろう。